

【新得】道内有数規模のメガファーム「友夢牧場」（町上佐幌基線108、植田昌仁社長）のハウス内で、頭上の棚からメロンが鈴なりに垂れる珍しい光景が広がっている。1株に数十個もなる上に、甘みも強いという画期的な水耕栽培。家畜ふん尿によるバイオガス発電の余剰熱を活用し、道内で初めて試験栽培に成功した。新たな地域ブランドとして期待が高まっている。



頭上から鈴なりに垂れるメロンと湯浅会長

メロンは栽培槽に立った支柱に向かってつるを上へ伸ばし、計16株が1株当たり20～30個の実を付けている。赤と青玉2品種で5月1日に種をまいた。540平方メートル

確保するために間引きが必要で、1株から数個しか収穫できなかった。この栽培方法では、液体肥料を吹き上げるようにしながら栄養分を行き渡らせる。メロンは根が腐りやすく水耕栽培に不向きと言われる中、東京の中小メーカーなどが開発。余剰熱活用法として湯浅会長が導入した。総事業費は約3000万円。

今回収穫したメロンは、8月4日にJR新得駅前で開催される「土曜日」で、町民向け無料試食会も行う。湯浅会長は『友夢メロン』として商品化し、町のふるさと納税返礼品をはじめ、全国の大手百貨店などに出荷したい」と展望を描いている。

ルのハウスの中に余剰熱を使った温水パイプを走らせ、室温を15～30度に保っている。「はら農場」（町上佐幌西2線）の原大知代表が栽培に協力している。

30日収穫した青玉メロンは、高級メロンの目安という糖度15度を超える18.5度。8月20日ごろまでに収穫が終わる予定。同牧場の湯浅佳春会長は「年3回の栽培で通年出荷を目指す」と手応えを感じている。

つるを地面にはわせる通常のメロン栽培では、品質を

<友夢牧場 ゆうむぼくじょう>

2000年に新得町内の農家4戸が出資して法人化、01年に開業した。経産牛約900頭、育成牛約600頭を飼育。敷地内に2基の家畜ふん尿用バイオガスプラントが稼働中で、1日に1000頭分のふん尿（約100トン）を処理でき、毎時300キロワットを発電している。年内に3基目が完成する。

出来はますます… ビート製糖 始動

2018年10月14日

十勝管内で今年産ビートの製糖作業が始まった。日本甜菜製糖芽室製糖所（芽室）では14日朝から、周辺農家で収穫されたビートが次々とトラックで運び込まれた。今年のビートは6～7月の天候不順で生育が一時停滞。その後の好天で遅れを取り戻したものの、収量は大豊作だった昨年を下回る見通しだ。日甜は、芽室製糖所で今年受け入れる数量を昨年比15%減の約92万トンと見込んでいる。



製糖作業が始まり、次々と運び込まれるビート

芽室製糖所はビートの処理能力が1日当たり8500トンと国内最大規模。製糖開始は昨年より3日早い。帯広、芽室、音更、幕別、中札内、更別の合計1万4000ヘクタールの農地で栽培されたビートを12月まで受け入れる。ビートは泥を落とした上で裁断し、糖分を抽出する。来春まで24時間態勢で製糖作業を続ける。

日甜によると今年産ビートは病害虫被害が少なく、作柄は昨年に及ばないが平年並みという。芽室製糖所の鈴木良幸所長は「ビートの収穫作業は11月中旬まで続く。この間、降雨が少なく収穫が順調に進むことを期待したい」と話す。

管内の製糖工場では、北海道糖業本別製糖所が17日から、ホクレン清水製糖工場が19日から操業を開始する予定。ビートの受け入れ数量は北糖が30万トン前後、ホクレンが31万3000トンとしており、それぞれ昨年より10%以上少ない。

全道のビート製糖量は昨年、約65万6600トンと農家に交付金が支払われる上限の64万トンを超えた。糖度次第だが、今年産はこれを下回る公算が大きい。